

創立百四十周年・再興六十周年記念行事を挙



デジタル版
第1号
令和4年5月

創立記念日にあたる4月30日、本学において創立百四十周年・再興六十周年を祝う記念行事が執り行われた。式典には彬子女王殿下の台臨を仰ぎ、神社界、教育界、大学関係者ほか約300名が参列した。

「創立、再興へのご支援、ご尽力に心から敬服

彬子女王殿下の台臨のもと創立百四十周年・再興六十周年記念行事が創立記念日の4月30日、本学記念講堂において挙行された。式典には来賓の方々ははじめ神社界、教育界、学内外から約300名が参列。10時30分、岡野友彦文学部長による開式の辞の後、殿下の御入場、国歌清聴、神宮遙拝に続き河野訓学長が令旨を奉

読した。式辞で河野学長は久邇宮朝彦親王の令達に始まった本学の歴史がGHQによる神道指令のため昭和21年に中絶したにも拘らず全国の有識者や神社界、卒業生、地元の方々の大いなるご支援のもと大学再興に至ったことに心からの敬意を表した。そして、現代の動きを鋭く捉えつつこれ

長よりご祝辞をいただいた。彬子女王殿下は本学で実施されている「心游舎」の御花神饌づくりワークショップの活動や寛仁親王殿下のお言葉に触れ、「改めて建学の精神に思いを致し、我が国の文明の発展のために一人おひとりが力を尽くしてくださることを祈ります」とご挨拶された。次に小串和夫理事長の告辞、千秋季頼館友会会長(熱田神宮宮司)のご挨拶と続き、来賓からは、小松揮世久神宮大宮司、鷹司尚武神社本庁総理、一見勝之三重県知事(代理 廣田恵子副知事)、鈴木健一伊勢市長よりご祝辞をいただいた。



告辞を述べる小串理事長(上)と式辞を述べる河野学長

からも皇學館の歴史と伝統を継承しながら、地域に貢献し未来を切り拓く人材の育成に努めてまいりたいと決意を述べた。

彬子女王殿下は本学で実施されている「心游舎」の御花神饌づくりワークショップの活動や寛仁親王殿下のお言葉に触れ、「改めて建学の精神に思いを致し、我が国の文明の発展のために一人おひとりが力を尽くしてくださることを祈ります」とご挨拶された。次に小串和夫理事長の告辞、千秋季頼館友会会長(熱田神宮宮司)のご挨拶と続き、来賓からは、小松揮世久神宮大宮司、鷹司尚武神社本庁総理、一見勝之三重県知事(代理 廣田恵子副知事)、鈴木健一伊勢市長よりご祝辞をいただいた。

「物故者慰霊祭斎行と」彬姫桜」記念植樹



斎主は三木通嗣講師

記念式典に先立ち、本学記念館において本学に縁のある3527柱の物故者慰霊祭が厳かに執り行われた。

式典後は記念館前庭にて「彬姫桜」の記念植樹を行った。この桜は十六夜桜の新種で、京都市の植藤造園第16代当主佐野藤右衛門氏が発見。同



お手植えされる彬子女王殿下

ことから殿下のお名前の一字を賜り、名付けられた。殿下が根元に鋤で土を3回おかけになると拍手が湧き、滞りなく記念植樹は終了した。

周年記念展示「伊勢と皇學館の140年」を開催



李さん(左)と手倉森さん(神道博物館前にて)

式典の斎行のほか、『皇學館大学百四十周年記念誌 飛躍と発展の十年』の刊行、記念学術事業として『伊勢神宮・大嘗祭研究文献目録』及び本学の教学の粋を集めた『皇学論纂』を出版した。また、本学のあゆみを通覧し発展の軌跡を広く紹介しようとして記念展示「伊勢と皇學館の140年」が佐川記念神道博物館にて5月2日から8月31日まで開催される(2面参照)。

同展示の図録編集に携わり記念行事に出席した国史学科4年の李恵さんは「記念の年に在学できて嬉しい」と語り、『皇学入門』は受講したが、より深い歴史に触れることができた。図録作成では神宮皇學館大学時代と成長できたと思う」と話した。

彬子女王殿下お言葉



本日ここに、皇學館大学創立百四十周年・再興六十周年記念式典が挙行されますことを、心よりお慶び申し上げます。

皇學館は、明治15年神宮祭主であった久邇宮朝彦親王の令達により、神宮の学問所に開設された「皇學館」がその始まりです。明治33年に神宮祭主の賀陽宮邦憲王よりの令旨には、『わが国の歴史に根差した道義と学問とを学び、実際の社会の中で実践して、文明の発

展に貢献する』という建学の精神が記されています。この10年の間、國學院大学と交互に2年に1度、皇學館大学の学生さんたちに、私が主宰しております心游舎の御花神饌作りのワークショップに参加してもらっております。石清水八幡宮で毎年9月15日に斎行される勅祭石清水祭でお供えされる、12か月の四季を表した植物染の造花の台を学生さんたちの手で作るというものです。ほとんどの花は男山から本物の竹や椿の枝を切り出し、化学的な材料をなるべく使わずに古式ゆかしい方法で造られます。初めてこれを作らせていただいたとき、自分の手元にあったときはただの紙で出来た造花でしかありませんでした。でも、お祭りが終わり、見たときにそ

うな感じになりました。この感覚を、将来神様にご奉仕する学生さんたちが経験するのは良いことなのではないかと思ひ、ご提案をしたのですが、神道学科ばかりでなく、学芸員課程を履修している国文学科や国史学科などの学生さんたちも参加して、いつも真剣に作ってくれています。男性の方が意外とまじめで上手であったり、分業制にして流れ作業で作りはじめるとグルーブがあつたりと、毎回学生さんたちの反応が違い、いろいろと発見があります。「文明の発展に貢献する」までできているとは思いませんが、「わが国の歴史に根差した道義と学問とを学び、実際の社会の中で実践する」ことはしてもらっているのではないかと感じております。

10年前の130周年の式典の際、父が皇學館、國學院、学習院の3校は、国内に数多ある大学の中で、文章に微妙な違いはあるものの、共通の建学の精神を持つ、他に類例を見る事の出来ない貴重な校風を有する、言わば「姉妹校」であり、伝統ある3校が手を携え、我が国の発展の為に努力してほしいと願っておられたことをお話いたしました。学習院出身の私が主催しているというかすかなつながりではございますが、御花神饌のワークショップを通して、父の思いを少しでも実現できた10年であつたかもしれません。皇學館大学創立140周年の節目の年に当たり、ご参会の皆様方には改めて建学の精神に思いをいたし、我が国の文明の発展のために一人一人が力を尽くして下さることを祈りつつ、私よりのご挨拶といたします。

お手植えの彬姫桜の如く

理事長 小串和夫



新型コロナウイルス感染症の終息が未だ見え、制約の多い中での開催でありましたが、厳粛且つ無事に終えることができました。

この機に創立時の原点に立ち返り、建学の精神を再確認すると共に、戦後廃学を余儀なくされた本学の再興に、ご尽力いただいた先輩方のご努力に想いを馳せる機会となりました。歴史と伝統の灯火を消すことな

く、150周年に向けて邁進する決意を新たにしなければなりません。なぜなら大学を取り巻く環境は大变に厳しい時代を迎えているからです。

式典後に記念植樹が行われ、彬姫と命名された新種の桜を彬子女王殿下に記念館の前庭にお手植えいただきました。この桜が風雪に耐え毎年毎年見事な花を付け、150周年には大きく育ち咲き誇っていることでしょう。本学もさもあらねばなりません。

創立百五十周年・再興七十周年へ向けて

時代にふさわしい大学を

学長 河野訓



け継ぎ、築き上げられた信用・信頼を継承してゆく責務があります。

本学は我が国固有のことば・文学、歴史、神道・思想文化に関わる教育研究を基礎としながら、ICT(Internet of Things)などによる成熟した情報社会の恩恵を享受しつつ、学修者主体の教育により、国際的な視野を備え、我が国の持

ちが建学の精神に基づいて培ってきた創立・再興以来の輝かしい歴史と伝統があります。今を預かる私達には将来に亘ってその志を受

統的発展を担い、教育界、神道、企業、自治体等、新たな未来社会のさまざまな分野で地域や社会を担う有為な人材の育成に努めます。そのためには不断の教育改革を継続し、省察を繰り返しながら時代にふさわしい大学の実現をめざします。

自然に恵まれた伊勢・志摩の地にあり、神宮の悠久の伝統を受け継ぎ、今後の永続的な発展を期して皆様とともに、皇學館大学は創立150周年に向けて歩み始めます。

創立140周年・再興60周年記念展示

5/2月〜8/31水

「伊勢と皇學館の140年」開催

皇學館大学の起原は、140年前の明治15年(1882)、林崎文庫内に創設された皇學館に遡る。その後、内務省管轄の神宮皇學館に発展、さらに文部省管轄の神宮皇學館大學へと昇格した。敗戦後、神道指令により廃学となるが、館友をはじめとする関係者の努力に

より昭和37年(1962)、私立大学として再興し現在に至る。

「わが国の歴史に根差した道義と学問とを学び、実際の社会の中で実践して、文明の発展に貢献する」という本学の理念は140年間変わらず脈々と受け継がれ、毎年有為の人

材を社会へ送り出している。

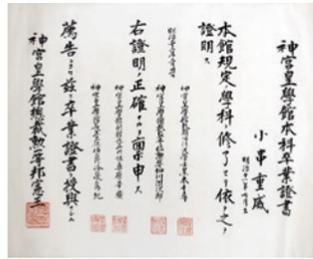
展示前半では、近代の宗教行政の展開と皇學館の創設、内務省所管の官立専門学校としての発展、倉田山への学舎移転、文部省が管轄する大学への昇格など戦前期における歩みを様々なテーマで紹介する。後半では、廃学から再興に至る経緯、再興後の大学における教育・研究環境の拡充と施設整備や学生生活の様子などを扱い、長きにわたって収集・保存されてきた数々の資料を展覧する。



「神宮皇學館全図」(明治29年、附属図書館蔵)
従来の校舎が狭隘だったことから明治29年(1896)に宇治館町に新校舎を建設した。正門は南に面し、校舎と寄宿舎など18棟の建築から成る。本図は建設の経緯を記した巻子に収められている。



賀陽宮邦憲王と「稽古照今」扁額(絵葉書、個人蔵)
明治33年(1900)2月18日、神宮祭主で神宮皇學館総裁の賀陽宮邦憲王の台臨があり、令旨を賜った。この令旨には創立の趣旨を踏まえ、皇學館における教育の根本精神が明瞭に示されている。



小串重威卒業証書(明治33年、個人蔵)
現存が確認される最古の卒業証書。小串重威は第9期の卒業生。明治33年は賀陽宮邦憲王令旨が出された年にあたる。



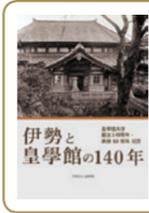
「惟神道場二関スル綴」/惟神道場の遷拝殿
昭和14年(1939)、貝島炭礦社長貝島太市の篤志によって惟神道場が建設され、神宮への道場献納式を経て神宮皇學館の附属施設となった(現在の芝生広場に所在)。



惟神道場は遷拝殿、大小講堂、食堂、潔斎所、事務所、陳列室、宿舎二棟を備えた鍊成施設であり、神職、学校教員、学生生徒、青年団などが各種の講習会・講演会を受講した。



神宮皇學館大學制帽
昭和15年(1940)、神宮皇學館は文部省が所管する神宮皇學館大學に昇格した。昭和17年には学部を開設した。学部生の制帽(左)は角形で記章は「大學」。予科学生の制帽(右)は丸型で記章が花菱紋。



図録販売のご案内
展示図録を神道博物館事務室にて販売しています。amazonなどインターネットでもご注文いただけます。
フルカラー 150頁 2,200円(税込)
発行：学校法人皇學館 出版：えにし書房



神道博物館でアンケートにご回答いただいた方にポストカード1枚をプレゼント!

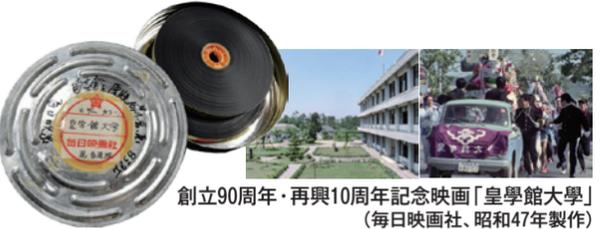
地鎮祭記念文鎮(昭和36年6月25日)



廃学後、館友や教員らを中心にして再興に向けた不断の努力が傾けられた。吉田茂を会長として後援会が組織され、ついに昭和36年(1961)にかつての神宮皇學館大學の跡地である倉田山で大学再興の地鎮祭が挙行された。

学生募集ポスター(昭和30年代~40年代 附属図書館蔵)

昭和37年(1962)、皇學館大学は再興された。当初は文学部国文学科・国史学科の2学科のみであった。徐々に校舎や図書館、体育館などが整備され、また昭和51年には教育学科、翌年には神道学科が開設された。



創立90周年・再興10周年記念映画「皇學館大学」(毎日映画社、昭和47年製作)

学生生活や、建学の歴史などをまとめたナレーション付き映画。令和4年、毎日映画社の協力により原フィルムからデジタル化を行い、当時の姿が甦った。最初の校舎である本館(1号館)の姿をはじめ、当時の大学の様子を知ることができる貴重な映像である。 ※展示室で上映

神宮皇學館講堂/講堂の鴉尾

昭和3年(1928)に建設された神宮皇學館講堂(通称：六角講堂)は空襲にも耐えたが、昭和41年に火事で焼失した。展示に際して石段周辺の斜面等を調査し、瓦片を発掘した他、跡地に置かれていた鴉尾のクリーニングを行った。



昭和58年度学生募集ポスター(附属図書館蔵)

2号館、3号館、図書館が写されている。これらの建物は創立90周年・100周年の記念事業として建設された。なお、図書館は平成5年(1993)に新築されたため現在とは形状が異なっている。現在は木々が大きく育っており、同じ場所でも印象は大きく違う。

